

Title	好色五人女：成立をめぐる試論
Sub Title	The Five Amorous Woman : A study in the making
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.5, (1955. 11) ,p.1- 20
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00050001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00050001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 好色五人女

— 成立をめぐる試論 —

檜 谷 昭 彦

貞享二年の西鶴年譜は、正月、加賀掾のために書いた淨瑠璃『暦』の上梓を以て始まる。同じ月『諸國はなし』の刊行に次で、二月廿一日『梶久一世の物語』が述作上梓され、春、『暦』『凱陣八嶋』が加賀掾下坂の興行に上演された後、七月十六日、西鶴は加賀掾の段物集『小竹集』に序文を書いて居る。これが八月六日に出板されてから、貞享二年が暮れるまで、西鶴年譜は全くの空白である。

この空白がばくりに齎す感想はさまざまである。だが空白はあくまでも空白であつて、それ以上真處に探るべき西鶴文學活動の實態は、新たに何等かの資料が発見されぬ限り、空白を事實として受けとる他はないだろう。ほぼ半歳にわたる空白があつて、翌貞享三年の、あの烈しい浮世草子の矢繼早な創作が生まれる。『近代艶隠者』が、今日ほぼ西鶴軒橋泉の作たる事を否定すべき確たる論證がないとすれば、貞享三年二月上旬の、『好色五人女』上梓を以て、本格的な、西鶴浮世草子の展開が約束されたと見る事も、當然な文學史の記述であるだろう。しかし乍ら、作品そのものは、生成發展する同一人の筆に成る以上、自ずと内面に相關する作者の意識を藏しても居る。今日的な見方をすれば、半歳の空白は、却つて持續する作者の内部生命が『五人女』生誕の陣痛の長きを物語りこそすれ、無爲に流れた時間ではないと謂われもしよう。二度と、筆を執ることなかつた淨瑠璃に、殆んど貞享二年の上半期、異常な程の情熱で打ちこんだ西鶴が、『梶久』上梓以後俳諧の筆も執らず、浮世草子の刊行も見ずに、ひたすら『五人女』の想を凝らしたのだと考えら



所説が志向する如く、これを西鶴作とすれば、西鶴年譜は是歳、『暦』と共に二つのしかも西鶴生涯に是限の淨瑠璃を有する事になる。加えて七月には『小竹集』編纂の仕事もある。管見によれば、この年の半年程、西鶴が演劇界へ情熱を燃やした事例はない。

同時に又、『凱陣八嶋』は、今日に至るもこれを西鶴作として確認すべき明證はない。依然としてこれは質疑本の部類に屬して居る。近松の作であるという根拠はずつと少くなつたけれど、それがその儘西鶴作を確認する論據とはなり得ない。『暦』にうかがえる餘りにも強い西鶴臭は、これと『凱陣八嶋』との比較を意味の無いものにして居る。だとすると、次に大事な事は、是年には重要な質疑本が二作『近代艶隠者』と『凱陣八嶋』と、ある事である。

今、この問題をどう解釋すべきか、論者は判らない。只、わずかに考えられるのは、『五人女』刊行の前年は非常に興味深い年であるという事だけである。一つは、西鶴の異常な程の淨瑠璃への情熱が生んで了つた『凱陣八嶋』の亡靈であらうし、一つは半歳近い沈黙が齎して了つた『艶隠者』の出現であつたらう。そしてそのどちらもが事實として西鶴の周邊にあつた事は疑えない。たといその作品の著作者論議が、西鶴の關知する所でないにしても、當時西鶴がこれを觀、それを讀みした事、何等かの印象をとどめたらう事は、間違ひあるまい。

樽屋是を見て扇子拍子をととりて戀はく、せもの皆人のと曾我の道行をかたり出す

(『五人女』卷二の三)

天和三年九月の刊記を有する近松の傑作『世繼曾我』の三段目の道行が、かく取りこまれてあるを見ても、一年前の淨瑠璃への傾倒が、相當『五人女』執筆の西鶴の態度に、今迄の浮世草子とは違つた影響を及ぼしたのであらう事が考えられる。そうして又、自畫自筆の板下を組んだ『艶隠者』の老莊思想も、よかれあしかれ、『五人女』に何程かの作用を果して居るかも知れない。

貞享二年下半期の空白は、かくて依然として論者にとつては大きな興味をその儘とどめた難問題として殘されて居る。

『好色一代男』には卷一から毎卷一章ずつ卷五までに、世之介が積極的に戀心を寄せた女性が配されて居る。

卷一、「たづねてきくほどちぎり」に於ける伏見榎木町の遊女、

卷二、「女はおもはくの外」の京、川原町の女房、

卷三、「一夜の枕物ぐるひ」の大原の女、

卷四、「囚果の關守」の信濃追分の女、

卷五、「後は様つけて呼」の吉野大夫、

以上の五名がそれである。これについては、かつて論證した事があるので略述するにとどめるが、これらの女性に對しては『一代男』中の他の女性と比較する際、極めて對蹠的な事例が見出される。卷の順序に従つて引例してみると次の如くである。

卷一、「やさしき女こと葉に敷なく、見られたき風情にあらず」

卷二、「去御方にありしよしにて、いとやさしき有様」

卷三、「色しろく、髮うるはしく、ものごしやさしく、京にもはづかしからず」

卷四、「やさしき女有ける」

卷五、「やさしくかしく、いかなる人の唄子にもはづかしからず」

以上のように、すべて「やさし」という形容詞によつて、この五人の女性が『一代男』中の他の女性群から區別されるのである。世之介の能動的な戀の對稱として、この五名にかぎり「やさし」なる言葉を用いたとも考えられる。

『一代男』が源氏物語を俳諧化したものであるというのは、今日一つの定説となつて居る。論者は、この五人の女性の形象が意味す

るもの一つを、源氏物語の横の系列を形成する、所謂玉鬘系の説話を當世風に俳諧化したものであらうと推定して居る。此處ではそれを説く事に主眼はない。この五人の女性に代表される西鶴の女性形象が『梶久一世の物語』に於ては三名の女性の上に表われて居る事に注目したい。これも繰返しになるので要點のみにとどめて置くが、その一は難波橋袂の女乞食である。梶久が心をひかれた美しい黒髪の手主は、「言葉にやさしき所あれば連を待たせて立戻り見」という描寫がある。その二は、梶久の妻である。「梶久妻たる人、心やさしく姿のうるはしき事」云々とある。その三は傾城松山ともおぼしき町家の人妻である。「其のやさしきこはつき人間とは思はず」とある。以上『梶久』に於ても「やさし」という語によつて女性を描寫して居るのはこの三名以外はない。

『梶久』三名の女性達は、これを『好色一代男』の女性達に較ぶる時、明らかに現實世相に立脚した發想の中から形造られて居る。『一代男』の肯定的な人間謳歌とは打つて變つた、餘りにも虚無的な、それ丈に却つて明るいこの『梶久』は、反面「やさしき女」の形象を假空の世界から庶民の足元に引き下したという面を有して居る。『一代男』の虚構性が自然その舞臺を京に集中せざるを得なかつた（四の項参照）に對して、『梶久』の舞臺はことごとく大坂を中心として居る。これは作者の視點の變貌を裏書する一證左である。『諸國ばなし』の創作を経て作品に對する咄としての意識、小説としての意識の高まりが、説話的手法の習熟と相俟つて、西鶴の内に醸成されつつあつた事も考えられるし、その事は『梶久一世の物語』という題名の、ものがたりとしての設定からも察せられて、彼の内部發展を語つて居る。だから、初め談林假名草子として轉合書した『好色一代男』という「はいかいの文章」が、よし貞門派への拮抗からの所産であつたとしても、次第に浮世草子としての定着が、作品を積み重ねて行く内に果されて行くのだという見解なのである。大ざっぱな敘述であるが、『一代男』『梶久』と、『五人女』をつなぐ線として矢張り缺くわけに行かぬ問題を包含して居るよう  
に考えられる。

『好色五人女』の五人の女性と、『好色一代男』の五人の「やさしき女」の關連、しかも『五人女』の内、おせん・おさんの兩名は人妻であり、且つ、扱われた事件は姦通である。『一代男』の五人の女性の内、卷二の川原町の女（小間物屋源介の妻）と卷四の信濃追分の女（牟入の人妻）とは共に人妻でありどころかも世之介との姦通がその主題となつて居る。この暗合も又、逃し得ぬ點で、作者の

意圖を探る一つの示唆であろうと考える。

三

先師曰、世上の俳諧の文章を見るに、或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入し、辭あらく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさかしきまくまくを探り求め、西鶴が淺間しく下れる姿有。吾徒の文章は慥かに作意を立、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云ひつゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐しくいゝとるべしとなり〔去來抄、故實〕。〔岩波文庫に據る〕

芭蕉が西鶴を評した言葉は、『去來抄』のこの文以外に残つて居ない。この言葉は主として西鶴の浮世草子に就いて言つたものと考へられて居るが、芭蕉は西鶴の浮世草子をはつきり「俳諧の文章」と言い切つて居る。「辭あらく賤しき」表現や、「人情を云とても今日のさかしきまくまくを求め」るような行き方は、「高くこころをさとりて俗に歸る」を念つた芭蕉には「淺間しく」感じられたに相違ない。西鶴の浮世草子を他山の石として、「吾徒の文章は……事は鄙俗に及ぶとも、懐しくいゝとるべし」と芭蕉は諭して居る。敢て長い引用を試みたのは他でもない。蕉門の人々が書く文章と、西鶴の浮世草子との間に、文藝上のジャンルの相違を、芭蕉は敢て認めずは居ない點を注意したかつたからである。もとより、俳諧師達はそれぞれ「俳諧の文章」を物して居る。假名草子とは、もと貞門の俳諧師がこれを擴め世上に流布したものであつた。中川喜雲の『京童』は、野々口立圃の協力に成るのだと、許六の『歴代滑稽傳』は傳えて居る。立圃また多くの假名草子を書いた。中でも源氏物語の梗概書が俳諧師の教養、教化に資する所大きかつた點は認めねばならない。そのことは談林俳諧にも言える事で、宗因の撰になると傳えられる『紅白源氏物語』は、俳諧師的な視野から書かれた積極的な古典の俗解書であつた。その目的とする所は、己れが依據する俳壇の俳風に立つて古典に對する俳諧の、その俳風の他との相違を訴えようとするものであつたと考えられる。約めて言えば、これら假名草子はすべてこれ「俳諧の文章」であつた。『好色一代男』また、

大坂談林の俳風よりする西鶴の「俳諧の文章」に他なるまい。芭蕉が去來に語つた前記の西鶴評は、西鶴に對する批評が目的であつたのではなく、實に「吾徒の」俳諧の文章作文上の警告だつたのである。『俳諧秘藏抄』なる書物によれば、西鶴は芭蕉の「辛崎の」句について、「此句連歌也」と其角に語つたと言う。この芭蕉と西鶴の見解の相違は、ほくらに新たな興味を喚ぶのであるが、徒らに近代的な解釋は加えるべきであるまい。とまれ、此處では西鶴の浮世草子が「俳諧の文章」として受けとられて居つた事が言いたかつた迄である。

その西鶴は、貞享元年六月、獨吟二萬三千五百句の大業をやつてのけた。これ以後西鶴はひたすら散文界に専心努力を致したとされて居る。しかし乍ら西鶴の年譜は、この年以後、浮世草子に専念する所か、却つて淨瑠璃に専心する姿を前述の如くあらわすのはどうした事か。俳諧から浮世草子へ、この方式が西鶴に立てられてからの歲月は長い。移り氣な輕口な談林の俳諧師西鶴の、一時の氣の迷いが貞享二年の上半歳を淨瑠璃で彩つただけの事と、先學は考えられての無視であつたらうか。此處の個處での拘泥は取るに足らぬ問題であるのかも知れぬ。だが西鶴が『好色五人女』へ行き着く道は、俳諧——淨瑠璃——浮世草子という曲折の行程であつた事は確かである。それは又、西鶴その人に、散文一途に意を定め切れぬ忸怩たる思いを抱かせる程、散文そのもののジャンルが、俳諧や淨瑠璃に比して未確立のものであつた事をも意味するのであらう。俳諧という「此一筋」の道を責めた芭蕉や、「白雲や花なき山の恥かくし」という一句を傳説のように遺して、淨瑠璃の道に突き進んだ近松に較べて、不惑を越えた西鶴は、散文界と律語界を、それこそ「淺間しく」低迷したのである。

そのことが良かつたかどうか、論者は知らぬ。唯、『男色大鑑』の記事を引合に出すまでもなく、芝居好きな西鶴がこの半歳の實作經驗から得たものは大きかつたらう事が考えられて來る。それが『五人女』へどう投影して來るのか、研究の不充分が説き明らめる事を妨げて居るが、世に謂われる五段組織の構成は恐らく妥當であらうと思ふ。『好色五人女』五卷五章ずつの構成は淨瑠璃五段組織の影響に成るといふ見方が、多少は可能に近附くように思えるのである。

山本健吉氏は次のように言う。(註二)



近松は武士の出であるらしいから、武家生活を知らなかつたわけではなからうが、時代物において、もつともリアルに生活感情を浮き出させねばならないところの三段目の會話でも、彼は町人の言葉を書してしまふのだ。そのような時代的・階級的な矛盾に彼はこだわらなかつたというより、聴衆が大坂の町人であつたことからそれは強いられたものだと語りべきだろう。

この事は逆に言つて、淨瑠璃は非常に庶民的な世界を描く藝術であるとも言える。目の前に觀客を置いて、觀客の脳裏に詞章と韻律を以て一個の木偶を人間に形象せねばならぬ。其處には觀客に程遠い生活感情の介入は許されぬ。公家も武士も法師も官女も、すべて庶民と同質の喜怒哀樂を表現せねばならぬのである。西鶴がこの庶民藝術を自ら創作した事は、三都の遊里を寫す筆から庶民の巷を寫する筆に轉じたと考えられる。「一代男」から「五人女」への推移の上に、相當大きく働きかけたものがあつた點を認めねばなるまい。さて、『五人女』の周邊をめぐつて、些か長きに惰した感がある。『五人女』そのものの考察を怠がねばならない。

#### 四

『好色五人女』は言うまでもなく五つの巻に分れて居る。全篇を貫くテーマは「好色」の二字に還元される。これは『一代男』『一代女』の場合と同様である。先ずはじめに、各巻の内題下の旁題に注目したい。それは次の様だ。

卷一、姿姫路清十郎物語、卷二、情を入し樽屋物かたり、卷三、中段に見る曆屋物語、卷四、戀草からけし八百屋物語、卷五、戀の山源五兵衛物語。

すべて「ものがたり」とある事に注意を引かれる。明かに物語の意識があつたと考えられる。旁題にせよ、はつきりと「ものがたり」を作らうとする意欲を見せたのは、先行文學と訣を分つに充分な西鶴の姿勢であらう。勿論『腕久』もその題に物語を銘打つて居る。

しかし『婉久』はあくまで大和屋甚兵衛の芝居に當込んだ、婉屋久右衛門の最期物語であり、較ぶべくもない小品である。『婉久』の延長上に、成熟した西鶴の作家精神が『五人女』を物語として構成したと見るべきであらう。

更にその配列を見る。

卷一の舞臺は姫路である。卷二は大坂である。以下、京都、江戸、薩摩となつて居る。即ち京都を中心に、大坂、江戸をその兩脇に置き、姫路、薩摩を兩翼に配した構成である。この構成は『好色一代男』の後半、卷五以下の配列に類似して居る。『一代男』の後半（名妓列傳の部分）は、卷五と卷八が、京都を中央に置き、地理的に考慮せられた配置が行われて居る。但しこの場合は兩翼に多く京、大坂を配して居る。そうして卷六、卷七なる中間の二卷は、京、大坂、江戸の三部のみに限つて居り、しかも兩翼には、京、大坂がきちんと配されて構成されて居る。かくて各卷に於て、第一章は京、第七章は大坂（卷八には第七章はない。又終章としての性質上場處的觀念は餘り濃厚ではない。）卷五と卷八の眞中の章、つまり第四章は京、卷六、卷七は三部のみ、と言つた構成が見られるのである。これを内容に互つて檢した結果、西鶴の三部遊里に對する遊里觀を單的に知る事が出来たと同時に、かかる配置が意味するものは談林俳諧的な「てんがう」であると結論したのであつた。これと似た配列が、『五人女』に見られる事は、同様に西鶴の常套的な俳諧的手段であると考えられる。だとすれば、新たな物語意識を内に藏し周到な用意の下に創作にとりかかつたと見られる『五人女』が、一面『一代男』の構成を引いて居る事實は、前述せる女性像の暗台と關連して何等かの意味を有して居るのではないかと考えられて來る。

五卷二十五章の各説話の女主人公は、お夏、おせん、おさん、お七、おまんの名である。内、おせんとおさんが人妻であり、他の三名は町家の娘である。そこで、この五つの物語を、女主人公の面から分類すると、人妻と處女との二つの形態に分けられる。まず、お夏、お七、おまんの三名を見る。この三名の説明描寫を、西鶴は次のように書いて居る。

お夏・・九右衛門妹におなつといへる有ける其年十六迄男の色好ていまに定る縁もなしされは此女田舎にはいかにして都にも素人

女には見たる事なし——中略——情の程もさぞ有へし（巻一、くけ帯よりあらはるゝ文）

お七・・此人ひとりの娘あり名はお七といへり。年も十六花は上野の盛月は隅田川のかげきよくかゝる美女のあるべきものか都鳥  
其業平に時代ちがひにて見せぬ事の口惜是に心を掛ざるはなし（巻四、大節季はおもひの園）

おまん・其比又きつまがた濱の町といふ所に琉球屋の何がしが娘おまんといへる有けり年の程十六夜の月をもそねむ生つき心ざ  
しやさしく戀の只中見し人おもひ掛ざるはなし（巻五、衆道は兩の手に散花）

この三つの文章から次の事が言える。

第一に、お夏、お七、おまん共に年齢は十六歳である。「ちくさのまへとていまだ二八の春もすぎ」〔凱陣八嶋〕と淨瑠璃では美女  
の年齢に多く十六歳を以てする。それかあらぬか三名共通して十六歳として居るのは類型的である。

第二に、三名共近在近郷に無比の美少女である。第三に、これらの娘を一目見た男で、思を掛けない男は居ないと言つて居る。

以上の事柄が不睦する事は、その描寫が非常に類型的にしかなされてないという事である。人物が類型的であるばかりではない。徳  
川初期の封建倫理の規制を破つて、世間一般の町家の子女であり乍ら、かかるいたずら事をやつてのける娘を表現するに、一律的な文  
辭を以てし、且つ一人一人の性格描寫は多く省筆によつて事件そのものを追つて行く。お夏もお七もおまんも皆統一ある一人格として  
は描かれて居ないのである。それと共に、もう一つ興味ある事は、この三名共にその戀は積極的である點だ。男に對して、それぞれ  
が「かすくのかよはせ文」を送つて居る。十六の娘の愚かな直情的な思索としても、その積極性は三名に共通して行動を伴つて烈し  
い。この戀への積極性は、すべて悲劇の性質を帯びて居るにも拘らず、西鶴の敘事は決してそうではない。藤村作氏はこれに就いて、  
「必ずしも戀愛悲劇として取上げたのではない。彼は戀愛生活の享樂面に目をつけると共に、偶然の人間の運命に於ける重大さに目を  
つけて一構成したのだと言われて居る」<sup>（註三）</sup> 悲劇の契機となるものは、『五人女』の場合、多く運命のいたずらである。戀愛の種々相と、  
偶然が負う運命の醜弄を描く事の方が、作者にあつて主眼だとしたら、もとより悲劇の構成などは念頭に浮びもしなかつたであらう。

悲劇の文學性は西鶴の世界には求むべくもないものであろう。三名の處女の形象が、かく類型的である事も當然であるように思われ  
る。

それではもう一つの形態に屬する、おせん、おさんの場合はどうであらう。繰返しになるがこの二つの説話は、まず事件の契機を成すものが共に姦通である點で一致して居ると言えよう。

おせんめいわくなから聞暮せしがおもへばくにくき心中とてもぬれたる袂なれば此うへは是非におよばすあの長左衛門殿になさげをかけあんな女に鼻あかせんと思ひそめしより各別のころぎしほとなく戀となりしのびくりに申かはしいつぞのしゆびをま  
ちける（卷二、木屑の杉やうじ一寸先の命）

これは樽屋の女房おせんが、主家の長左衛門と密通するに至る心情の變移を傳える一節である。「され共情の道をわきまへず一生枕ひとつにてあたり夜を明しぬ」とはおせんに關する描寫であるが、こんなに堅い身持の女が、思いつめた行爲に出るのは餘程長左衛門の内儀の格氣が憎かつたのだから、それにしては上記の説明は簡單であり過ぎる。又、それへ至るためのおせんの性格描寫が物足りぬし、第一夫の傍で長左衛門と密通するという設定は如何にもずばらな方法である。それだけに夫に發見されて、鎚鉋で胸元をきし通して自殺するという結末がまことに唐突である。そうした感じはおさんの場合にも同様に言える。

よもや此事人にしれざる事あらじ此うへは身をすて命かきりに名を立茂右衛門と死手の旅路の道づれとなおやめがたく心底申き  
かせければ（卷三、してやられた枕の夢）

茂右衛門と不義に陥つた夜のおさんの心理描寫である。彼女の心理のこの急激な變化を讀んでばかりは多少の戸惑いを憶えるのであ

る。今日のぼくらには、所謂リアリテイが稀薄なように感じられるのである。恐らくそれは、ぼくらが現代の尺度で『五人女』を計つて居るからかも知れぬ。或いは又作者の狙いとぼくらの受容とに幾許のずれがあるからかも知れぬ。おせんもおさんも、人の婦女にはあるまじきいたずら者であると、言わぬ計りの西鶴の筆の運びであるからである。

姦通は大きな罪悪である。人として、不倫これに過ぐるはない。讀者の側に、判断はそれと、用意されて居つても、とかく主人公に同情し勝な讀者は、いたずら女をいたずら女として書いた人間形象に接しては、あきたらぬ感情を抱きがちなものである。えてして評價は、主人公の側に立つて讀んだ讀者が、作者の意圖とは異つた結論を齎して了うのである。時代や社會に對する反抗の姿勢を、西鶴に求め、作中の人物に求める事は誤りではない。それが可能なら、はじめて作品は民族の古典として定着し得るであらう。今日的な意義とは、作品自體の分析が生む價值と意圖との認識の上に、作者を超え時代を超えたりアリテイを抽出する事が可能な時にのみ考えられる。封建的な制約の中で、力いっぱい生の自由な主張を叫んだ女性像を形象したと結論出来たら、『五人女』について物言うことは盡される。其處には作者西鶴の深い全人間的な同情がなくてはならない。だがしかし、それは『五人女』の文學的形象が、生み出してつた文學的現實を、結果から歸納しようとしたものではなからうか。もしかしたら、西鶴は五人の女すべてを決して眞の同情から描いたのではなかつたかも知れぬのである。卷五「衆道は兩の手に散花」に、西鶴は次のように書いて居る。

女程おそろしきものはなし何事をも留めける人の中には空泣しておどしけるされば世の中に化ものと後家たてすます女なしまして男の女房を五人や三人ころして後よびむかへてもとがにはならし

女の悪業にくらべたう、男が三人や五人後妻をめぐつても咎め立てする筋合ではないと西鶴は言う。俳諧師の筆の滑り、單なる修辭と、考えるに思ひ切つた文章ではなからうか。

これに類した言葉を各巻から抽出すれば次の如きである。

菟角女は化物姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし（巻一、大鞍による獅子舞）

されば一切の女移り氣なる物にしてうまさ色咄しに現をぬかし——中略——うるはしき男にうかれかへりては一代やしなふ男を嫌ひぬ是ほど無理なる事なし（巻二、こけらは胸の焼付さら世帯）

中にもいたづらかたぎの女を持あはず男の身にして是程なさげなき物はなし（巻三、身の上の立聞）

女をつよからずしてよき事に無用の言葉（巻四、虫出しの神鳴もふんどしをかきたる君サマ）

女程おそろしきものはなし（巻五、前出）

こうした一連の文章をばくらはどう解釋すべきであろう。前作『諸國はなし』の巻四、「忍び扇の長歌」に「さる大名の姪御様」の見事な形象を果した西鶴を知つて居るばかりが、今これらの文章の文字づらから受けとる印象は意外である。しかし又、ばくらは、一方で次のような西鶴をも知つて居る。

されども町の女の風俗は外なり色里のよき事見馴れてそれには何かつゞくべし（『権久一世の物語』上巻「世界は夜が盡」）

どんなに美しくすぐれた女であつても、所詮地女は地女だけのことしかない。才覚あつて金錢を貯える事は町人道の第一義である。

貯えた金は折にのぞんで費消する事を知らねばならぬ。けれども費消しつくす事を避けるのが、町人として當然執るべき配慮であり處置であろう。遊里に遊んで分知りと言われ色事の表裏に通曉し乍ら、しかも程良く我身を御して貯えを減らさぬのが、才覚ある人間である。が、また遊女のよさを知らざるは女房に鼻毛をよまれる「山出しの月」<sup>註三</sup>でもある。地女になき遊女のよさは、先ず遊里に遊んで自ら味えよと西鶴は説く。その觀想は、浮世草子十餘年の創作過程を通じて變る事がない西鶴であつた。その觀想と、これと、一見關わりはないかに見えて基は一つである。浮世草子の本質は浮いて浮いてなぐさみ、男色女色の色道二つを「水に流るゝ瓢箪のごとく」<sup>註四</sup>わたり暮す愉悅を描くに在る。町人階級の世界を、その生活を、如實に描くと言われた所で、その描き方、その態度は、どこまでも好色の相を踏まえた浮世なる視點からするそれであつて、洒落が滑稽が、そして所謂俳諧が作の基底にある事は否めないのである。

若い女年寄男こかれても

水性火性もゆるる相性

五體五倫皆かり物の浮世町

つかひすこして跡はからだび（茶尾）<sup>〔カツコ〕</sup>（仙臺大矢數・西鶴の獨吟）

現實の事象の表面を擦過して行く表現は、生涯の大半を捧げた俳諧生活が、西鶴に植えつけたものだつたらうし、浮世草子そのものも、それ以上を要求しては居なかつたようである。「とかく女というものは」<sup>（註五）</sup>そう書く筆は深い思慮から生まれたものではない。眞面目を装つて、事は卑俗な下世話の道理に寄せる。如上の一連の文章は、俳諧一流のを、こな表出を狙つた浮世草子の常套なのである。西鶴自身の内面には關わる事なく、遊女を地女の上位に擧げ、女一般を好色の面からのみ評價する事は、つまりは浮世草子の有する一つの通弊なのであつた。だが、西鶴の浮世草子がこれにとどまる限り西鶴の西鶴たる本領はない。これら卑俗な觀想が更に一步を進めて古典の俳諧と絡み合つた一つの人生批評となる所に、『五人女』の面目が表われて来る。人間そのものを、次のような言葉で語つた西

鶴がある。

人の情は一步小判あるうちなり（巻一、戀は闇夜を晝の國）

天満に七つの化物有——中略——是皆年をかさねし狐狸の業ぞかし世におそろしきは人間ばけて命をとれり（巻二、跡はくづれ桶夜更て化物）

人はみな移氣なる物ぞかし（同、こけらは胸に焼付さら世帯）

されば世の人程だいたんなるものはなし（巻三、身のうへの立聞）

命程頼みすくなくて又つれなき物はなし中／＼死ぬればうらみも戀もなかりしに（巻四、様子あつての俄坊主）

さりとは死なれぬもの人の命にそ有ける（巻五、もろきは命の鳥さし）

人の身程あさましくつれなき物はなし——中略——女程おそろしきものは云々（巻五、衆道は兩の手に散花）

「扱も死なれぬうき世に御座候。」とは、『文反故』の一節であるが、この世にまさしく存在する人間同志の現實生活が、矛盾や虚偽や葛藤の渦の中で、流轉の宿世を流れるとする。中世の隠者達や連歌師輩の感想が、元祿文化の底の方にか黒く尾を引いて承け繼がれて居つたのだと、考えてこれをも俳諧師西鶴の單なる修辭とは片附けられない。人生を宿世と觀じ、輪廻の業と見る事は、古典文學の傳統的な一つの觀念である。西鶴又、これを意識下に有して居た事は疑えぬ所である。「さだめて御身やみづからが。くはこのかたきが子と生れ御手にやかゝるらん。何事もさだまるごう必なげかせ給ふなど」（凱陣八嶋第五）「しよせん兼政とさしちがへうきよのまうしうはらさんと」（曆第一）。これらは淨瑠璃の定まり文句と言う程によく用いられる慣用句ではある。それらは何等の拘束もなしに、素朴に聴衆の情感に訴えて來たに相違ない。「歡きながらも月日を送る」という投節の文句と同じ様に、西鶴はさまで深い顧慮を拂わず、上記の言葉を各卷に鏤めたのかも知れない。



今日の受容の仕方では、どうにもならぬ程、西鶴の浮世は今日の時代とはかけ離れて居る。ぼくらが、お夏と清十郎の馳落を單純過ぎ無鐵砲すぎると見ぬまでも、何か割り切れなさが残るという受けとり様が、却つて西鶴には不思議であるだろう。當時の讀者には『五人女』の心情の移り行きはすべて素直に胸底に這入つて來るものだったのだから。つまりはそれ程に時代の封建制は厳しくもあつたのである。がしかし、そうした社會に生きて、人間の深奥に巢食う悲哀が、自己の心象の冷やかさにまぎらさすべない哀しみが、甲斐なき浮世に死なれぬ命と歎ずる言葉は今も深くぼくらの心に迫つて來るであらう。

總じて人間ほど淺ましく不人情なものはない。浮氣で慾深で執念深い。そう西鶴は言う。悟りました隠者のようなこれらの言葉つきを、かくてぼくらは矢張りまともに受け取る事は危険であらう。そう語り乍ら、かく女性への不信を連ね乍ら、西鶴程人間をよく眺め、貧婪な程よく描いた作家はない。「人程可愛らしき者はなし」とは『諸艶大鑑』の中で、同じ西鶴が書いた言葉である。隠者風な感想や封建道德の説教染みた言葉の下に、あくまでも執拗におせんやおさんを描出して行く西鶴の眼があるようである。だとしたら、如上の引例は一體何であらう。謂うならば、それらは彼一流の俳諧なのであつた。

五篇を通じて西鶴は、その女主人公である市井の女性達の生き方を決して悲劇的には描いて居ない。場面々々のつなぎをを、かしみと諧謔で連ねて行く。其處には町人社會の切迫した危機感もなければ封建的な規制の中でもかく女の悲劇感も感じられない。例えば、お夏清十郎が馳落する場面で、飛脚が状箱を問屋に置き忘れたために、兩名が捕えられる所などは餘りにも俳諧的な洒落であり滑稽である。こうした面から見る限り、西鶴の態度はあくまでもはなしとしての態度である。

かくして論者は、談林假名草子としての「俳諧の文章」、『一代男』『腕久』と經るにつれて目を市井の女性に向けた西鶴の筆が、周知の著名な五人女を拉し來たつて、これを物語に綴ろうとする時、其處に談林俳諧特有の穿つた配慮があつたに相違ないと思うのである。

前述せる如く、『一代男』中に見出される五人の「やさしき女」の内、二人の夫妻は世之介との姦通を犯して居る。『一代男』が、謂

われる通り源氏物語光源氏の一代を模した結構とするならば、世之介と二人の人妻の場合と同一主題に成る『五人女』の樽屋おせんと暦屋おさんとは何を意味するのだろうか。しかも『五人女』の配列又、『一代男』に酷似して居る。巷間にあつて喧傳された衆人周知の女性をとらえて、『五人女』を仕組んだ作意は、『一代男』の世之介が光源氏という周知の古典の主人公を踏まえた手法と同様であろう。上記の引例は、以上の如く考えて來ると、單に女性への不信の言葉、人間に關する觀想という域にとどまらずして、それらは俳諧的な一つの批評の立場から發せられた言葉であるように思われて來る。「とかく女は化け物」「世におそろしきは人間ばけて命をとれり」「人はみなうつり氣なるもの」、無暴かも知れないが、論者はこれらの言葉から、源氏物語の光君や夕顔や末摘花を想ひ浮べて了うのである。

## 六

能でも淨瑠璃でも、三番目は全曲の骨子とされる。能では戀物がその演能の中心であつたし、淨瑠璃では三段目は最も世話物的な、一曲の要であつた。『五人女』がそうした五段組織の影響を受けたとするなら、やはり三番目の説話は世話物的な全篇の中心でなければならぬ。三番目に位するのは「中段に見る暦屋物語」である。この物語は、五つの物語中最も緊密な構成と見事な描寫を持つて居る。殊におさん茂右衛門の兩名が、丹波越する道中の、おさんの描寫は心憎いまでによく描かれて居る。一々論じて居る餘裕を持たぬが、その作品の價値の高さは充分納得され得ると思ふ。しかし、今此處で説こうとするのはそれではない。

本書「人をはめたる湖」(卷三)の冒頭は次のようた。

世にわりなきは情の道と源氏にも書殘せし爰に石山寺の開帳とて都人袖をつらね東山の櫻は捨物にして……

石山寺の縁語で源氏を引いて来るのは連俳の手段である。その源氏の引用について、『定本西鶴全集』（中央公論社刊）の頭註に、暉峻氏と野間氏が説かれる所に従えば、「世にわりなきは情の道」なる言葉は源氏物語にはないが、寛永二十年刊の『心友記』、『諸艶大鑑』の兩書には出て居ると言う。（全集第一卷、第二卷）因にこの句を用いたもう一つの例を『諸艶大鑑』から引いてみよう。

有時物覺のよはき人。わりなきは情の道と書しは。柏木の卷にはなきとあらそひ。去太夫殿へ。源氏物語を借に遣しけるに。其ま、湖月おくられて艮座ぎざに其埒きざもあけしに。（卷七、勅の身銀の切賣よりは）

これで見ると、「世にわりなきは情の道」なる句を、柏木卷に出て居るとしたのは西鶴の錯覺という事になる。事實柏木卷にこの言葉はない。よく俳諧師の口の端に乗つた言葉であつたに違いないが、この言葉を、西鶴が不用意に『五人女』に用いた事が問題である。この句が源氏にないと知つて居れば、あれだけ用意周到な彼が好んで誤りを犯す事はあるまい。知らざればこそ、そして柏木卷にあると信じて居つたればこそ、西鶴は石山寺の縁語にこの言葉を思い付いたのであろう。かく考えれば、この西鶴の錯覺は重要である。何故なら源氏物語柏木卷は、若菜、横笛の二卷と共に、柏木と女三の宮の不倫の行爲を一篇の眼目にして居るからである。そうして、それが、おさん茂右衛門の不倫の行爲に直接結びつく關連があるからである。今試みに『好色五人女』の二つの姦通事件、樽屋おせんとおさん茂右衛門の場合を考えてみる。

おせんと長左衛門とは近所の出入りの女房と富裕な町家の亭主との關係である。格式ある町家の亭主と人妻との間に起つた愛慾である。それに較べておさんと茂右衛門の場合は、主人の内儀と手代との關係であり、身分の低い男と主人の女房の愛慾と考えられる。源氏物語に於て大きな姦通事件とは何であろう。數うれば藤壺と光源氏、空蟬と光源氏、女三の宮と柏木……とある。この内源氏物語の傍系と見られるものは空蟬、柏木の卷々であろう。先ず空蟬の場合はどうだろう。受領層の伊豫介の後妻空蟬と青年貴族光君の姦通である。他は朱雀院の女三の宮と柏木衛門督の姦通である。對人關係に於てこの兩者はそれぞれおせん、おさんの場合に適合する。縷々

述べて来た如く、云い得べくばこの二つの物語は、源氏物語空蟬柏木の併譜化を一方で擔う意圖がうかがえるのである。さきに『一代男』『梔久』の例を引いて「やさしき女」と『五人女』との暗合を説き、源氏物語横の系列玉鬘系のパロディに非ざるかと推定して置いたのはこの事に他ならない。つまりは、源氏物語の併譜化は、『好色一代男』『好色五人女』の二篇を以て完成すると見る。「されば世の人程だいたんなるものはなし」という西鶴の嗟歎は、古典への批評を含む皮肉な談林風のでんがうだつたのである。

お夏、お七、おまんの處女達が類型的な中にも、その戀の積極性を認められるのは、當世女が古典の女性に比してはるかに當世風な意志に基く行動をするのだという西鶴の見解を示すものかも知れない。虚構を構えず、古典に據ると見せず、現實世相の描寫の内に、談林本來の併譜を包みこめて、難波談林假名草子の眞髓を世に問うた『好色五人女』の意圖が、かくしてやや明らかとなるのではあるまいか。

好色の二字を逐い求め、色道の至極を説き、しかも西鶴は「粹」の境地を終に説かなかつた。『近代艶隠者』の老莊思想は、西鶴その人の根柢に、たとい何等かのよどみを残したとしても、『好色五人女』そのものに豪も關わる所なかつたと言い得よう。

以上、この試論は、源氏物語の併譜化を志す談林假名草子の連作として、『好色一代男』『好色五人女』の二作を西鶴が試みたのではないかという推定の儘で終えねばならない。試論はあくまでも試論であつて、それが念う所は西鶴研究のより進んだ發展以外にない。貧しい若輩の一考察が、先學の研究によつていち早く崩される事が實は最も望ましいのである。西鶴の意圖したものが假にこの試論の如くであつたにしても、『好色五人女』それ自體の文學的價值は、作者の意識を超え、時代を超えて、作品そのものの有する見事なりアリティを今日に傳えて居る。ぼくらが受け取らねばならぬのは、正にこの西鶴獨自のちからに他ならない。

× × ×

貞享三年春、江府深川の庵に於て、芭蕉は彼の「古池や蛙飛びこむ水の音」なる一句を物した。世にこれを蕉風開眼の句と唱えた秀句である。

同じき年、三十四歳の近松は、京にあつて竹本義太夫のために『出世景清』を書いた。世に謂う新淨瑠璃の嚆矢である。

『好色五人女』は、こうした年の早春に世に出たのだつた。江戸に新風樹立の芭蕉があり、京に古淨瑠璃と訣別した近松があつて、大坂の地に全く新しい浮世草子が誕生する。元祿文學の開花にとつて、貞享三年という年はまことに感慨深い年と言わねばならない。

〔註〕

(一) 『定本西鶴全集』(中央公論社刊)第十四卷解説、野間光辰氏

(二) 雑誌「群像」三〇年九月號『近松の周邊』

(三) 『譯註西鶴全集』(至文堂刊)第一卷「西鶴の文體」藤村作氏

(四) 『浮世物語』(淺井了意、萬治三年の作とされている)卷一「浮世といふ事」

『五人女』その他の引用は『定本西鶴全集』中央公論社刊に據つた

尙年譜考證は野間光辰氏『西鶴年譜考證』中央公論社刊を参照した